

《報告書》

多者協働のまちづくり
「知ることからはじめよう！
ヤングケアラーの実情」

日時：令和5年12月14日(木)

午後2時00分～4時30分

場所：イングビル 3階 第3・第4会議室

主催：西東京市市民協働推進センターゆめこらぼ

目次

1. 本事業の目的と概要	1
1.1 本事業の目的	1
1.2 開催概要	1
1.3 プログラム	1
1.4 参加者	1
2. 内容	2
多者協働のまちづくり 「知ることからはじめよう!ヤングケアラーの実情」	
3. 参加者のご感想	4
4. 総括	4

1. 本事業の目的と概要

1.1 本事業の目的

地域連携促進事業として、平成27年度から開始した「協働のまちづくりワークショップ」は、多者協働の実例、実践方法等を市民、行政、企業など様々な立場の参加者で学び、協働のきっかけに繋がる場として企画開催してきました。

「子どもがど真ん中」のまちづくりを打ち出している西東京市でも、ヤングケアラーと呼ばれる子どもたちや若者が相当数いると思われ、多くの子育て関連団体や市民の関心度は高いものがあります。そこで、知見が深い講師による講演会とワークショップを企画しました。講演会では、現状と実例、そして国や自治体・地域の対策、実際の対応例などを学び、ワークショップでは、問題意識のある多様な立場の参加者が意見交換をすることで認識を深め、それらを通して、ヤングケアラーの負担軽減という課題解決に向けて、地域課題の気づきや支援の輪を広げるための多者協働について考えていくことを目的としました。

1.2 開催概要

日時 令和5年12月14日(木) 午後2時00分～4時30分

場所 イングビル 3階 第3・第4会議室

講師 NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン理事長
一般社団法人日本ケアラー連盟代表理事 牧野史子氏

対象 市民団体・子育て関連に関わる団体・市民・学校関係者など

定員 30人募集

1.3 プログラム

14時00分～ 挨拶

ゆめこらぼセンター長 檜出浩雅

14時05分～ 講演・ワークショップ(休憩含む)

NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン理事長
一般社団法人日本ケアラー連盟代表理事 牧野史子氏

16時10分～ グループ発表・講師からのコメント

16時25分～ 閉会挨拶

アンケート記入

1.4 参加者

30人(講演のみ参加者2人含む)

2. 内容

【講演】「知ることからはじめよう!ヤングケアラーの実情」

ケアラーの定義を含めた基本的なことから、ヤングケアラーの社会的背景ならびに、重いケアを担う事により受ける影響、支援のベースや考え方、そして今、地域や社会でどのようなことが始まりつつあるのかを実例をあげた話がありました。

ヤングケアラーとは、その言葉のとおり、18歳未満の子どもを指しますが、現在の日本では、介護をしている家族を支える法律がなく、介護者の負担が年齢にそぐわないことが問題となっています。

多くの問題を抱えているヤングケアラーを見つけることの難しさ、またヤングケアラーが求めている支援と支援する側の認識のギャップが生まれるケースがあるという点など、課題についても触れられました。

そして、「皆さんがケアラーにお会いしたら、とことん自分の価値観を捨てて傾聴してください。それが、ケアラー支援の根本です」と重ねて話され、「西東京市では放課後カフェという素晴らしい取り組みがあるので、是非、ヤングケアラー支援にも活かしてもらいたい」と結ばれました。

また、講師は当事者だけでなく、かつてヤングケアラーだった方々への支援にも取り組んでいます。介護はヤング世代だけでは終わらず、その後も続くケースが多々あるため、支援継続の大切さについても気づかされる講演でした。



牧野史子氏

NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン理事長
一般社団法人日本ケアラー連盟代表理事

【ワークショップ】

<テーマ>

1. 感想も含めて、今日ここにきた動機を | 人 | 分

2. 地域での活動の中でできることは?

- ヤングケアラーと実際に接した方は、その様子を含めどのような対応をしたことがありますか。
- 自分の地域でこういうものがあつたら良いと思う資源や支援など、妄想でよいので出し合ってください。「仮にこんな子どもがいたら、このように支援しましょう」など自由に話し合ってください。



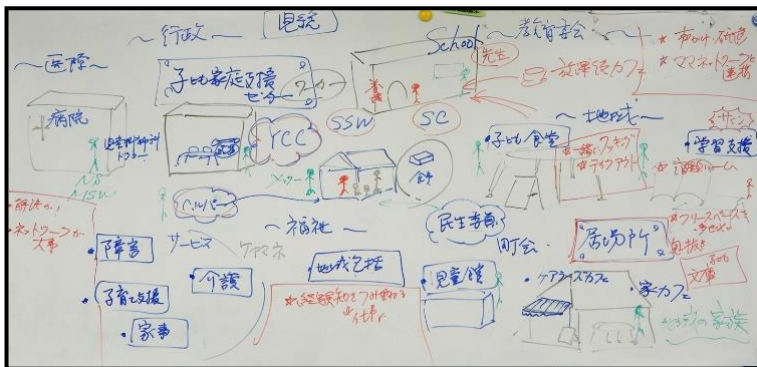
多様な立場の参加者が混在するグループをつくり、それぞれの立場から意見を交換。当初ワークショップに消極的だった方々も徐々に打ち解け、どのグループも議論が盛り上がる様子も見られ、円滑に進められていました。



各グループの代表者1名が発表。時間内に意見がまとまったグループもあれば、結論までたどり着かなかったグループもありましたが、いずれのグループも有意義な意見交換ができたことがうかがえる発表でした。

<各グループの意見> ※抜粋

<p>・学校が一番のカギだが、学校だけでは解決は困難。誰でも行けるカフェや児童センターなどで信頼関係を築いていけるとよい。</p> <p>・サインに気付いた時に相談できる場所がわからない。子どもだったら児童相談所なのか。ケアマネに相談したり、訪問介護、看護の方が子どもたちにも目を向けたりする必要もあるかもしれない。</p> <p>・自分は看護師なので虐待などの疑いがあれば、医師や児童精神科などにつながる。</p> <p>・世代を超えた居場所をつくり、交流のできる場があれば理想。</p> <p style="text-align: right;">【A】</p>	<p>学習支援で出会った10歳の小学生。話をする中で、視覚障害のある父親と精神疾患を抱えた母親と暮らし、家が汚い状況であることが判明。当人はこの状況をどこに相談すればよいか悩んでいたため、小学校に相談にいったが、2か月経過しても音沙汰がない。</p> <p>ヤングケアラーの疑いがある子に接した時、どこに相談して、どんな言葉をかえたらよいか、言葉のかけ方などを普段から相談できる場所を知りたい。</p> <p style="text-align: right;">【B】</p>
<p>困っている子どもの具体的な状況には、貧困、一人親家庭、ネグレクトという特徴があった。西東京市には拠点多いという強みはあるが、活かしきれているかが疑問。身近にある子ども食堂などには、友達に知られたくないなどの理由で行きづらいこともあるのでは。地域を越えて支援者がいると子どもも頼りやすいのではないか。</p> <p style="text-align: right;">【C】</p>	<p>・食事を提供するだけではなく、一緒に料理ができる子ども食堂があれば、自然と会話が生まれ、ヤングケアラーを発見できるかも。</p> <p>・行政の施設も活用しながら、地域限定ではない子どもが息抜きでき、自ら話せるカフェのような場が増えていけばよい。</p> <p>・子どもとの接し方を学べる研修や勉強会など支援する側への支援もあるとよい。</p> <p>・対高齢者の地域包括支援センターのような場が子どもにもあるとよい。</p> <p style="text-align: right;">【D】</p>
<p>宿題ルームで出会った小中学生の兄弟の事例をもとに検討した。祖父の介助を兄がしなければならなくなり、学校に通えなくて困っていた。いじめではないこともあり、周囲に情報共有がされていない。そのような子どもに接した際に、どのようなネットワークに繋がたらよいかかわからない。社会全体で分担して助け合うことができればよい。</p> <p style="text-align: right;">【E】</p>	<p>・ヤングケアラーを見つけた時に、学校に伝えたらよいと思うが、伝え方がわからない。</p> <p>・地域資源としては、子どもが立ち寄れる場、子ども食堂ではテイクアウトできる場があるとよい。お母さんたちのネットワークも頼れると心強いのではないか。</p> <p>・ボランティアに頼るばかりでなく、仕事の一部、制度の仕組みとしてできていくとよい。ヤングケアラーが大人になったときにその仕組みが地域の資源になるのではないか。</p> <p style="text-align: right;">【F】</p>



各グループの発表により、ヤングケアラーをとりまく環境や考えられる支援のあり方のマップが完成!

<最後に講師から>

皆さんの発表は西東京市の特徴がちりばめられており、新しい資源も見えてきたのではないかと思います。まず、発見したら子ども家庭支援センターへ相談して欲しい。具体的な支援については、ワーカーが寄り添って方法が考えられていく。今後ヤングケアラーコーディネーターという職種が市役所や教育センターへ設置される予定ではある。

最後になるが、今回の講座の様にいろいろな啓発を地域で進めてもらい、我々自身がいろいろなネットワークを持ち、いろいろな目線を持ち、いろいろな登場人物がいる事を知ってもらいたい。

3. 参加者のご感想

- ◆ 地域におけるヤングケアラー支援活動を考えさせられる講座でした。これからも地域活動にかかわっていきたいと思います。
- ◆ ヤングケアラーがどこにいるか、どうしたらケアができるか、接することが可能と思われるイベント等に参加しなくては・・・と気持ちを改めました。
- ◆ ヤングケアラーの側からみた問題点、意識などに触れる機会は少ないため、貴重な機会となりました。
- ◆ 地域活動の連携が必要、重要だと思いました。
- ◆ ヤングケアラーは課題を抱えたまま大人になってしまうため、よりヤングケアラー支援が大切なのだと感じました。
- ◆ 大変な状況におかれている子どもたちが多くことに驚きました。その問題を深堀していくと、社会全体のあり方が問われているのではないかと思います。
- ◆ 実態を知りたかったので、いかに厳しい現実かがよくわかり、とても良い企画でした。
- ◆ ヤングケアラーコーディネーターの実際の活動内容も知りたかった。
- ◆ ヤングケアラーと接する方法や場所を具体的に知りたかった。

4. 総括

今回の事業には、市民、自治体職員、社協職員、市民活動団体、看護師、民生委員など30人が参加しました。

ワークショップでは、立場の異なる参加者でグループをつくり、講演内容をもとに意見交換が行われました。

現在、国においてもヤングケアラー支援法制化（国や自治体が支援を努める対象にヤングケアラーを加える）に向けて動きがあり、今後ますます問題が顕在化していくと予想されます。

多くの参加者が課題として挙げていた“ヤングケアラーの発見”はしやすくなると考えられますが、同じように多くの意見があった“ヤングケアラーをつなげる場”の問題など、具体的な支援の仕組みについての課題が大きくなることが予想されます。

今回の事業が、今できる支援についての新たな気づきにつながり、支援の輪が広がるきっかけとなったのであれば幸いです。

限られた時間の中で、参加者のニーズに応えられなかった部分もありましたが、今回の参加者のご要望は今後の事業につなげていきたいと思っております。